

〔史料紹介〕

西巖寺藏「小川貫式資料」より太原崇善寺調査関係資料（口絵一、四）

「崇善寺宋元大藏経存欠調査と整理の爲め特務機関の援助方申請の件」

「崇善寺藏経調査備忘録」

「太原崇善寺所藏宋元版大藏経存欠調査日記抄」

「昭和十六年八月太原崇善寺所藏宋元両大藏経存欠調査報告書」

高木 祐紀

小川 徳水

藤井 由紀子

昭和十六年（一九四一）七月、五台山の調査を終えた小川貫式は、山西省の省都である太原に移った。この太原には、西本願寺が置かれていて、貫式はここをベースに、崇善寺や双塔寺など、市内の主な寺院で大藏経を中心にした調査にとりかかる。特に、崇善寺は、貫式の行った中国調査のなかでも、最も成果をあげた寺院のひとつである。明時代の洪武十四年（一三八一）、洪武帝の三男が母の供養のため、唐時代の白馬寺跡に再興したと伝えられる古刹であるが、ここで貫式は白雲宗が開版

したという、元時代の南山普寧寺版の大藏経を発見した。貫式によれば、これは元時代の江南の仏教信仰を伝える貴重な資料であり、早速、太原に置かれていた山西省の軍特務機関に出向いて、その整理と調査に対する支援を申し入れている。その結果、調査資金と必要物資、さらには、真宗大谷派の学僧であり、特務機関員でもあった菊地宣正の協力を得て、貫式は約一ヶ月間の調査に臨むことになった。

本稿で紹介する四種の記録は、この崇善寺大藏経の調査に携わったと

きのものである。すなわち、最初の「崇善寺宋元大藏經存欠調査と整理の爲め特務機関の援助ヲ申請の件」は、特務機関に支援を求めたときの申請書の草稿で、当該寺院で調査に着手するに至った経緯が判明するし、「崇善寺藏經調査備忘録」と「太原崇善寺所藏宋元版大藏經存欠調査日記抄」は、調査の際、逐次記された覚書と日誌類で、戦時下で經典調査に取り組んだ研究者の生の声を伝える貴重な資料だといつてよい。さらに、「昭和十六年八月太原崇善寺所藏宋元版大藏經存欠調査報告書」は、カーボン紙を使用していることから、特務機関に提出した、いわば調査の成果物であったと考えられる。

こうした記録類を通して、特に注目されるのは、崇善寺の經典調査に軍の特務機関が積極的に関与していた、という事実である。日中戦争時、この特務機関は中国の各地に置かれ、さまざまな情報を収集する機関として機能していたとみられるが、こうした古刹の宝物にも関心を寄せて、必要経費のほか、筆・墨・紙などを支給していたことや、機関員を調査現場に派遣して、こまめに調査の様子を報告させていたことなど、戦時下における文化工作活動の一環として、情報収集が実際にはどのような形で行われていたかが、具体的に明らかになる。また、山西省は日本に協力した中国人の数も多かった地域であるが、この調査も崇善寺の中国人僧侶との連携のもと行われており、仏教というものを介した日本人と中国人との関係がどのようなものであったか、教えてくれる点でも示唆的である。さらには、太原西本願寺の様子や、道端良秀という

大谷派の仏教学者が見学に訪れた時の様子など、西本願寺の興亜留学生として中国の地で調査にあたった貫式をとりまく人間関係や環境が垣間見える点も大変に興味深い。

現在、崇善寺の大悲殿の東西両房には、磧砂版大藏經、元版大藏經、明版大藏經などが保存されていると聞く。今回紹介する記録には、貫式たちがこの崇善寺の普寧寺版を大切に扱い、調査終了後、特務機関から保存用の白布や新聞紙を調達して、丁寧に梱包し、崇善寺に戻した様子も記されているから、大悲殿両房に蔵されている大藏經のなかに、貫式が発見し、整理した大藏經も含まれているとすれば、中国仏教史上の貴重な經典類が、貫式たちの調査を経て、今日まで伝えられた可能性があり、本記録類はこれらの資料群その過程を示すものとしても注目される。

〔凡例〕

一、漢字は原則として現行の字体を用いた。ただし、異体字などをそのまま用いたものもある。

一、本文の改行は「／」で示した。

一、句点は、原史料にしたがって「。」と「。」との双方を用いた。

一、史料二―四については、いずれも太原の崇善寺で約一ヶ月行われた調査の記録であり、それぞれ日誌風に日付を追って記されているため、翻刻するにあたっては、対比上の便を考えて、三段の表形式を採用した。なお、史料四は、冒頭の目録によると、六項よりなる報告書であったと想定されるが、紙幅の都合上、別冊となる第四項・第五項は割愛し、第三項までの翻刻にとどめた。なお、第六項の「調査会計報告書」は、現在、西巖寺には蔵されていない。

史料一（口絵一）

「崇善寺宋元大藏経存欠調査と整理の為に特務機関の援助方申請の件」

崇善寺宋元大藏経存欠調査と整理の為に／特務機関の援助方申請の件

今度蒙疆山西各地に現存せる漢文大藏経の學術研究のため、／今月廿五日來原、目下崇善寺大藏経を見学中の者にて候。今春五台山／特務機関員酒井、菊地両氏により崇善寺に宋元版磧砂延聖禪院本／大藏経の存在することが内外各新聞雑誌に報道され、学界の未聞として／学界は詳細なる存欠調査報告を待望する状態にて候。今般／小生も、支那仏教史研究の一学生として待望の余り來原した一人にて／一昨日來見学中、従来の磧砂版大藏経には大・小二部の大藏経が存する／外に、新しく杭州南山大善寧寺版大藏経一部を発見し、これ亦大陸／に於ては、雲南省立圖書館に其残欠をみるのみにして大陸の學術文化研／究に欠く可らざる貴重な資料にて候。而もこの善寧寺大藏経は六千数百／卷一千数百部の、大仏教叢書にして、他蔵に見ざる典籍を収める／単なる個人的な調査のみでなく、他蔵の混／合と分離して整頓し、その存欠を詳細にして嚴重なる保管をする／ことが目下の急務と心得候。小生の旅行目的は大藏経の研究調査／なるも、ここ兩三日にて所要の目的は完了致すべく候へ共、若し一貴機関に於て／その存欠調査整理（マ）に対する御理解と御援助を賜り他に二、三の助手の援助にてこれを為／し社会公共の為に献身努力の熱意にて候。／

史料二〇四（口絵二〇四）

「崇善寺藏經調査備忘録」

「太原崇善寺所藏宋元版大藏經存欠調査日記抄」

「昭和十六年八月太原崇善寺所藏宋・元両大藏經存欠調査報告書」

崇善寺藏經調査備忘録

崇禪寺藏經調査備忘録

七月廿日 西本願寺藤谷主任の案内で崇善寺に詣し、住持廣浄師に面会す。宋磧砂版／大藏經の一帙を見学し明日よりの調査を約し帰途図書館に深尾主任を訪／れ書庫漢籍を見て帰る。／

七月廿七日 早朝より崇善寺にゆき宋版經庫を開してその外に元の南山善寧寺版大藏經一藏の存在／するを発見したり。／

七月廿八日 崇善寺藏經調査：正午菊地機関員、岩上画伯來寺。東道にて／博物館の見学をなし午後再度崇善寺にて藏經の調査をなす。／

太原崇善寺所藏宋元版大藏經存欠調査日記抄

太原崇禪寺所藏
宋元版大藏經存欠調査日記抄

昭和十六年八月太原崇善寺所藏宋・元両大藏經存欠調査報告書

昭和十六年八月
山西省太原崇善寺所藏／
宋・元両大藏經／存欠調査報告書
目録

- 一、 宋元版大藏經存欠調査日記抄
二、 宋版磧砂延聖禪院大藏經概説
三、 元版普寧寺版大藏經概説
四、 宋版磧砂延聖禪院大藏經存欠目録（別冊）
五、 元版普寧寺版大藏經存欠目録（別冊）
六、 調査會計報告書

七月廿九日、菊地機関員の東道にて特務機関文教班に挨拶し、崇善寺大藏經整備／の後援を申請す。佐藤中尉の案内で恩田補佐官／に面会要談をなす。午後再度予定表を作製して出頭佐藤中尉殿に提出す。／

七月卅日 午前崇善寺にて大藏經調査をなし午後特務機関に出頭、特務機関よりの／崇善寺大藏經整備存欠目録の製作を約束し筆耕、其他目録製作費として百円の下附をさき、／筆墨紙の支給を受けて帰る。／

七月三十一日、菊地機関員と二人で本格的に大藏經の整備に着手。その手法は千字文番号順にカー／ドをはさみそれに存欠を記入し、各経本の配置を経つて、これを包装しそのときカードをぬきとりて目録製作に着手する方法をとり正確を主義となす。一応並べ始む。第一日は約一千二百巻／をなす。元管主八施入五台山菩薩院本数冊を発見す。佐藤中尉殿来寺視察あり。

八月一日、雨なるも早朝より配置に従事す。大殿中は寒さを覚ゆ。夕刻まで全力で約一千巻を並べ終る。西夏文藏經の断簡／を発見す。／

八月二日 前日通り九時より配置に着手す。天気よく案外はかとりて今日は三千二百巻まで整頓す。北宋福州東禪等覺院／藏經の零本出ず。期待する福州の東禪等覺院本大藏經の出現なく不思議なり。／

七月二十九日、小川菊地機関員の東道にて山西省特務機関に来原の挨拶をなし、佐藤宗教係、鈴木文教班長、恩田輔佐官に面会／し崇善寺大藏經ノ重要性ヲ説明シテ整備可否ニ付懇談セリ／

七月三十日、午前中崇善寺にゆき、午後省特務機関に出頭し機関／より崇善寺宋元版大藏經存欠目録の製作を委嘱さる。目録製／作要する材料支給を受く。／

七月三十一日、今日より毎日午前九時より午後六時に至るまで崇善寺に／於いて大藏經の調査を始む。整備の方法は千字文と通番号をカー／ドに記入し一応順序に配列をなす。昔経散乱シ寸余ノ塵埃ニマミレテ整理意ノ如クナラス午後佐藤機関員（マ）の来寺視／察を受く。第一日は約一千二百巻を並べ終る。／

八月一日、雨天なるも早朝より藏經の配置に従事す。この日元僧録／管主八の施入せる五台山菩薩院の秘密仏典数冊を発見す。大／殿中は寒さを覚ゆるも夕刻まで頑張りて二千二百巻まで並べ終る。／

八月二日、前日通り九時より配備にかゝる。天気よく今日は案外量どり／て三千四百巻まで進む。該寺は大正時代常磐大定博士の来原のとき北／宋福州版大藏經数冊を拝見されしことあり、今年北京よりの調査研究員の話に現存の由を聞く、これを見学するも今調査の目的なり。福州版／の出現を待望してやまず。／

七月二十九日 小川菊地機関員ノ東道ニテ山西省陸軍特務機関ニ来原ノ／挨拶ヲナシ、佐藤宗教係、鈴木文教班長、恩田輔佐官ニ面会シ／崇善寺大藏經ノ重要貴重ノナル事ヲ説明シテ整備可／否ニ付懇談セリ／

七月卅日 午前中崇善寺ニ行ク午後省特機ニ出頭シ、機関ヨリ／崇善寺宋元版両大藏經存欠目録ノ作製整理ヲ／委嘱サル、目録製作ノ材料若干ノ支給ヲ受ク、／

七月卅一日 本日ヨリ毎日九時ヨリ十八時ニ至ル迄デ崇善寺／ニ於テ大藏經ノ調査ヲ始ム 整備ノ方法ハ千字文ト通番／号ヲカードニ記入シテ一応順序ニ配列ヲナス藏經散乱／シ寸余ノ塵埃ニマミレテ整理意ノ如クナラス。午後佐藤機／員ノ視察アリ、第一日ハ約一千二百巻ヲ並べ終ル／

八月一日 雨天ナルモ早朝ヨリ藏經ノ配列ニ従事ス、此ノ日元僧録／管主八ノ施入セル五台山菩薩院ノ秘密仏典数冊ヲ発見ス、大殿中／ハ寒サヲ覚ユルモ夕刻マデ頑張ツテ二千二百巻マデ並べ終ル／

八月二日 前日通りニ開始シ案外進ム三千四百巻マテ進ム、該寺ハ／大正時代常磐大定博士ノ来原ノ時北宋福州版大藏經数冊ヲ／発見サレシ事アリ、今年北京ヨリ調査研究員ノ話ニ現存ノ由聞／クモ出現ヲ待望シテヤマス／

八月三日、前日に變らず同時刻に着手するも昨日のつかれで、仕事はかどらず四千巻許までを整理す。此日は寺に／念経ありて人士の出入多く調査に不便なれば午後三時迄に中止して帰途に就く。／

八月四日、今日は昨日休息に元氣を得て頑張つて元版を最後まで整頓し、小大藏積砂版の整備に着手す。前日の骨休めて／うんと馬力をかけて完了したり。西本願寺藤谷主任の来寺見学あり吾等を慰問さる。／

八月五日、菊地機関員は午前中特務機関に中間報告の爲め出頭す。午後来寺宋積砂小藏／版の整頓に着手す。高原機関員と整備方法を相談す。元藏五百五十函分／の包布を整備する話あり。菊地機関員目録製作費百円受領し帰る。マント五十円／

八月六日、急用の爲め整備事業中止。休憩となす。家にて積砂版目／録のカーボン復写。／

八月七日、菊地機関員機関会議に出席す。／元版藏經の刊記を書写し、午後図書館にて藏經参考文献を見学／の読書をなし、夜は積砂藏の復写をなす(弁当マント三十円)／

八月八日、午前双塔寺に大藏經有無調査にゆき、午後は積砂藏の復写を／なす。弁当代一元。高原機関員罰代五帖を機関より届けうる。／

八月三日、此日寺に法会あり人士の出入多く調査の事業に不便なり。／整頓意の如く量どらず。午後三時に中止す。四千余巻まで終る。／

八月四日、昨日午後の休息に元氣を得て今日は五千巻まで配置す。／西本願寺藤谷主任の来寺あり慰問を受く。／

八月五日 菊地機員省特機の中間報告にゆく。高原氏帰原あり崇善／寺大藏經の調査整理と将来の保管方法を談す。元版藏經の整頓／を終る。菊地機員目録製作費を受領し帰る。／

八月六日 積砂版小藏經の整頓に着手す。大般若六百巻・大宝積經／涅槃經は宋積砂版大藏經と同一版本なるも装禪は全く異なる。／調査の結果至正九年版四大部經にして積砂版に非ることを判明／せり。／

八月七日 菊地機員省特機の会議出席のため午前中休む。元版藏／經の刊記を終日書写す。／

八月八日 小藏經の整頓を終る。今日西夏文字大藏經の断片、扉画／の説法図三分の一頁と天牌の一頁の僅かに二頁大のものなり。／西夏文字は二十八字を存す。これ西夏王李元昊と野利仁榮の製作／に係る文字にして西夏学の貴重資料なり。この西夏文大藏／經は元大徳年間に松江府僧録管主八が聖旨を奉じて杭州路大／万寿寺に於いて彫印せる三千六百二十余巻本にして今日崇善寺より／発見せるものは正しくその断片なることを信す。／

八月三日 該寺ニテ法要アリ 人士ノ出入多ク調査ノ事業ニ不便ナリ／

八月四日 西本願寺藤谷主任ノ慰問激励ヲ受ケ五千巻迄行ク／

八月五日 菊地ハ中間報告ニ機関ニ出頭ス、高原機関員ノ帰／寺ニテ藏經保管ノ件ニ付談ス、目録製作費受領ス／

八月六日 積砂版小藏經ノ整頓ニ着手ス 大般若六百巻大宝積經涅槃經ハ／宋積砂版大藏經ト同一版本ナルモ装禪ハ全ク異ル、調査ノ結果／至正九年版四大部經ニシテ積砂版ニ非ル事判明セリ／

八月七日 菊地機員五台山座談会出席ノタメ午前中休ム、元版藏經／ノ刊記ヲ調査ス／

八月八日 大般若六百巻・大宝積經・涅槃經ノ整理終ル。／学界問題ノ「西夏文字大藏經」ノ断片扉画ノ説法図／三分の一頁ト天牌ノ一頁ノ僅カラ発見ス。／

「附記」――西夏文字ハ二十八字ヲ存ス 此ハ西夏王李元昊ト野利仁榮ノ製作／ニ係ル文字ニシテ西夏学ノ貴重資料ナリ 此ノ西夏文大藏經ハ／元大徳年間ニ松江府僧録「管主八」ガ聖旨ヲ奉ジテ杭州路大万寿寺ニ於テ彫印セル三千六百二十余巻本ニシテ今日崇／善寺ヨリ発見セルモノハ正シク其ノ断片ナルモノト信ス／

八月九日 宋・磧砂版ヲ書架ヨリ取出し千字文順ニ配列ス、(第一日)ノ	八月九日、磧砂版に混入せる元版の抽出のため磧砂版ヲ書架より取出し千字文順に配列す、(第一日)ノ	八月九日 磧砂版ニ混入セル元版ヲ抽出ノタメ磧砂版ヲ書架ヨリ取出シノ千字文順ニ配列スノ
八月十日 (第二日) 宋版整理配列第二日、宋版中ニ元版普寧寺本及び明版南京版大藏經ガ混合セリ、ノ中国仏教後援会弁事員、大藏經千字文書写ヲ委託ス、ノ	八月十日 宋版整理第二日、宋版中より元善寧寺版、明南京大報恩寺版を数ノ十冊抽出す。今日より崇善寺中国仏教後援会弁事員を動かして藏經千字文ノを書かしむ、ノ	八月十日 宋版中ヨリ元普寧寺版、明南京大報恩寺版ヲ数十冊抽出スノ中国仏教後援会弁事員ニ藏經ノ千字文ノ筆耕ヲ依頼スノ
八月十一日 (第三日) 宋版整理配列第三日、ノ	八月十一日、宋版整理第三日、前日は全く元版を発見す。宋福州開元寺本大藏經ノ零本数冊を見出す。然し有るべき東禪等覺院本未だ発見されず、ノ	八月十一日 前日同様ニ整理中元版、宋福州開元寺本大藏經零本ノ数冊ヲ見出す、然シテ東禪等覺院本未タ発見セスノ
八月十二日 (第四日) 宋版整理配列、第四日、ノ午後明南藏殘欠本整理をなす、ノ	八月十二日、宋版整理第四日、一応配置を終り、午後明南京版大藏經にカードをノはさみ整理を終る。明南藏は零本なるも万曆二十年前後の刻本なり、ノ	八月十二日 整理配列終リテ明南京版大藏經ノ精査ヲ開始ス 此ノ經ハノ萬曆二十年前後ノ印本ナリノ
八月十三日―十五日 佐藤中尉来寺慰問サルモ、不在ナリ、菊地元版目録製作、西本願寺ニ孟蘭盆ノ為メニ休ミヲノ	八月十三日、十四日、十五日、孟蘭盆法会のため調査を中止し家にありてノ宋・元版存欠目録の復「ママ」写をなす、ノ	八月十三日 孟蘭盆法会ノタメ調査中止シテ宿舍ニテ宋・元兩版ノ存欠ノ目録ヲ製作シ其ノ復(ママ)写ヲ宮崎長野ノ依頼ス 十四、十五日同様ノ
八月十六日 大谷大学道端教授来寺、參觀アリ。午後ハ博物館図書館東道スノ(昼食フランス料理)	八月十六日、抽出零本を配備して宋版大藏經のカードの調査整理をなす。大谷大学道端良秀ノ教授来寺大藏經參觀、道端教授の指導を仰ぐ、ノ	八月十六日 抽出セル元・宋ノ藏經ヲ精査シテ抽入セリ、大谷大学道端ノ良秀教授来寺アリテ指導及懇談シテ研究セリノ
八月十七日 菊地宋版カード調査、小川元版刊記書写(午前)ノ	八月十七日、元版刊記の書写をなし、午後より宋版を書架に整納してノ納む、(第一日)ノ	八月十七日 元版刊記ヲ研究調査シ、宋版ヲ書架ニ納ムノ
宋版書架整納(第一日)ノ		
八月十八日 宋版書架整納(第二日) 午前午後ノ大谷大学道端教授来寺參觀(夕食英樺飯店三人会食ス)・高原機関ニユキ包装新聞紙ヲ持参サル、ノ	八月十八日、宋版を書庫に納む、(第二日) 道端教授の指導をうく。ノ高原氏機関より元版包装用の新聞紙を届けらるノ	八月十八日 宋版ヲ書架ニ納メ終リ、高原・道端ノ来寺ニヨリテ元版ノ包ノ装ニ付研究シ新聞紙ニテト云事ニ定マリ 高原機関ヨリ新聞紙ヲ受領シ来レリノ

八月十九日 宋版書架整納(第三日) 残本宋元本別書架ヨリ発見ス。／元版藏經包裝 千字文付開始。小川元版刊記筆写。／

八月二十日、菊地元版藏經包裝 千字文付、(菊地)小川元版刊記筆写。／佐藤中尉来寺、慰問サル。小川宋版目錄製作(夜)／

八月二十一日、小川元版刊記筆写。菊地元版包裝。／午後、巻端 道端両氏来寺。夕食菊地、本願寺慰安会食ス／金刻華嚴經発見す。／

八月二十二日、元版包裝。(二百十五―三三〇)ブドウ酒、一本、(菊地)／
(晴)道端氏来寺。高原先生ヨリ茶菓ノ応待ヲウケ。／

八月十九日、宋版を書架に納む(第三日) 午後別の書架より宋・元版大藏經零本を／数十冊発見す。福州宋版大藏經の零本中に／華嚴經卷第二 日本国僧慶政捨／と刊記のある一帖を発見す。鎌倉時代に(南宋寧宗嘉定年間) 我日本僧慶政上人が渡海して／福建に大藏經を求めたとき旅費を喜捨して板木を補／刻したるものなり。七百余年前に慶政上人喜捨の刊記ある福州版大藏經は僅めて少く／旧西山法華寺藏の現宮内省圖書寮本には華嚴經卷二十二、涅槃經卷三十三に／あるのみ崇善寺新出の華嚴經卷二の日本国僧慶政捨の刊記は学／界未聞のものにして日華仏教文化交流史上の貴重資料なり。／

八月二十日、今日より元藏の新聞紙包装を始め。別記の如く元大藏經は学会重要／なる遺物なれば可及の保管方法を考へ、種々対策を構じたるに経費の都合にて遂に紙魚、塵埃、散佚を防ぐ意より新聞紙を用ふ。／佐藤機員の慰問あり。／

八月二十一日、元版包裝第二日、菊地終日糊にまみれて包装にかゝる。／小川は元版刊記筆写に一日をついやす、巻端氏来寺参観、／道端教授指導、金刻華嚴經を十数冊発見す。／黄紙折本なるも元来卷子本にして北宋神宗より金の皇統泰和の刊記を有し六百六十年前になる学界貴重本なり。北宋官版遼金大藏と同じく十五行字詰でその覆刻に非ざるかと思はる。

八月二十二日、元版包裝第三日、二人して終日包装するも百帙余にて夕刻となる。／道端教授指導 高原氏より茶菓の応待をうく。／

八月十九日 別ノ書架ヨリ宋元両版大藏經零本数冊発見ス。／福州宋版大藏經ノ零本中ニ華嚴經卷第二「日本国僧慶政捨」ト刊記ノアル一帖ヲ発見ス。／附記：鎌倉時代ニ南宋寧宗嘉定年間我日本僧慶政上人／ガ渡海シテ福建ニ大藏經ヲ求メタル時旅費ヲ喜捨シテ板木ヲ／補刻シタモノナリ、七百余年前ニ慶政上人喜捨ノ刊記アル福州／版大藏經ハ僅メテ少ク旧西山法華寺藏ノ現在宮内省圖書／寮内ニハ華嚴經卷三十二涅槃經卷三十三ニアルノミ、今回ノ発見ハ／学界未聞ノモノニシテ日華仏教文化交流史上ニ貴重資料ナリ。／

八月二十日 元版大藏經ヲ新聞紙包装ヲ始め、別記ノ如ク元版大藏經ハ学／界ニ貴重ナル遺物ナレバ可及ノ保管ノ保管方法ヲ考へ、各種都合上散逸ヲ／防グタメニ包装ヲ初ム 佐藤機員ノ激励ヲ受ケ／

八月二十一日 巻端氏来寺参観、金刻華嚴經十冊発見ス、道端教授指導受ケ／
附記：金刻華嚴經ハ黄紙折本ナルモ元来卷子本ニシテ北宋神宗ヨリ金ノ皇統泰和ノ刊記ヲ有シ六百六十年前ニナル学界ノ貴重ナル資料ノナリ、北宋官版遼金大藏經ト同ジク十五行字詰デ其ノ覆刻ニ非サ／ルカト思ハル／

八月二十二日 元版大藏經ノ書架ヲフマキユーラニテ消毒ス、元版ノ包装ス。／元延祐二年福建、建陽版毘盧大藏經ノ大方廣佛華嚴經卷二十八ノヲ発見ス。／附記：元建陽版ノ經ハ従来大般若經大宝積經ノミトサレシモ、今ノ回ノ華嚴經ノ発見ニヨリ更ニ一ツヲ加フニ至レリ。／

八月二十三日、^(晴)午前八時道端、菊地、野中諸兄共ニ晋詞鎮・七月大会見学ノ為メ、元蔵包装ノヲ中止シ一日ノ情遊ヲナス。部隊慰問(五・〇〇)、昼食(四・〇〇)道端先生支払、／

八月二十四日、元版包装。新郷・藤井両氏深尾主任来寺参観ノ三二〇……五〇〇帙、／

八月二十五日 元版包装完了。元蔵ヲ經庫ニ収ム。正午ヨリ特別資料經典ノヲ写真シ。道端教授来寺。小川目録書写、／

八月二十六日 午前菊地、小川特務機関出頭中間報告。午後包装セシモノヲ書庫ニ収ム、／

八月二十七日 午前休。午後崇善寺ニテ刊記書写写真屋ニユク、／

八月二十八日 目録復写製作(於西本願寺婦人会館)／

八月二十九日 目録復写(於西本願寺幼稚園) ^(活)／

八月三十日、目録復写、(於西本願寺幼稚園)／

八月二十三日、元版包装第四日、一日頑張つても意の如く進まず蠅が多くてフマキノヲを散布して頑張る、／

八月二十四日、元版包装第五日、午後東本願寺開教監督新郷氏一行、深尾図ノ書館博物館主任来寺参観、種々会談す。／

八月二十五日、元版包装第六日、今日で包装を終る。正午道端教授指導の下に貴重ノ仏典を写真に撮る、学界未聞の仏典を試写す、／

八月二十六日、午前菊地、小川省特務機関に中間報告のため出頭す。午後包装ノせる元版を書架に納む。／

八月二十七日、終日包装した元版大蔵經を書架に納め終る。蔵外仏典の調ノ査をなし、その刊記を書写す。元至正二十五年版華嚴經三十余帖ヲ発見ス。一紙二十五行十五字詰にして磧砂版元普寧寺版本と異なる。然し磧砂版ノこのこ至正二十五年本を以て補充し同一装禎をなせるより崇善寺所蔵ノ磧砂版の印刷年代は元末カ明初ニナルものである。先年西安臥龍ノ寺開元寺発見の磧砂版より印刷年代は下るものと考へる。／

(※最終ページは計算メモのため割愛)

八月二十三日 元版大蔵經包装セルモ意ノ如ク進マズ、／

八月二十四日 元版大蔵經包装ヲ進マシム、東本願寺開教監督新郷氏一行ノ深尾図書館博物館主任参観ニ来ル、／

八月二十五日 元版宋版其ノ他貴重ナル仏典ヲ道端教授ノ指導ノ下ニ撮影ヲ行フ、／

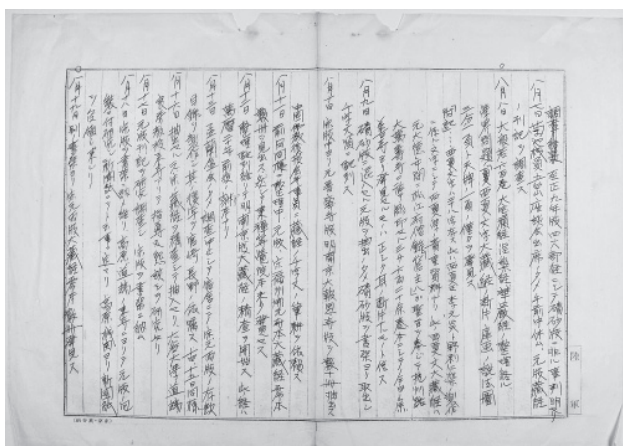
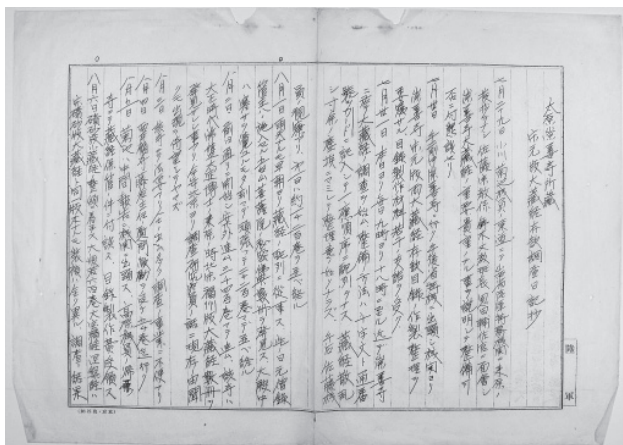
八月二十六日 特機ニ中間報告ノ出頭ス、午后元版大蔵經ヲ書架ニ納ム、／

八月二十七日 蔵外仏典ノ調査ヲナシ、刊記ヲ精調シ、元至正二十五年版華嚴經三十余帖ヲ発見ス。一紙二十五行十五字詰ニシテノ磧砂版元普寧寺版本ト異ナル、然シ磧砂版ニハ此ノ至正二十五年本ヲ以テ補充シ同一装禎ヲナセルヨリ崇善寺所蔵ノ磧砂版ノ印刷年代ハ元末カ明初ニナルモノデアル、先年西安臥龍ノ寺開元寺発見ノ磧砂版ヨリ印刷年代ハ下ルモノト考ヘル、／

八月二十八日―九月三日ノ元版宋版其ノ他ノ仏典調査セシ整理報告書製作ノタメ西本願寺ニ於テ事務ヲナセリ、／

(※以上はカーボンコピー、菊地宣正筆カ)

挿図 「昭和十六年八月太原崇善寺所藏宋元両大藏經存欠調査報告書」 第2紙（第11紙）

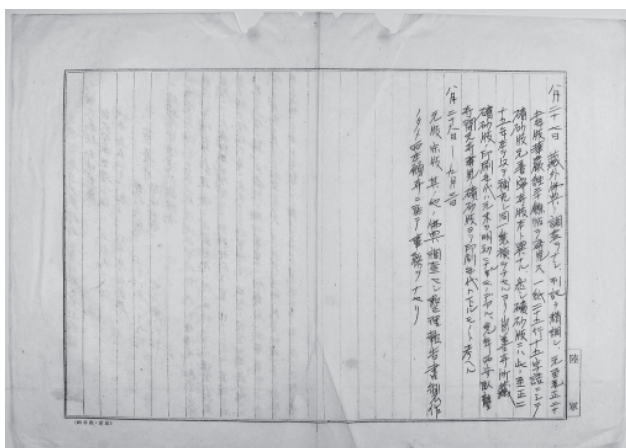
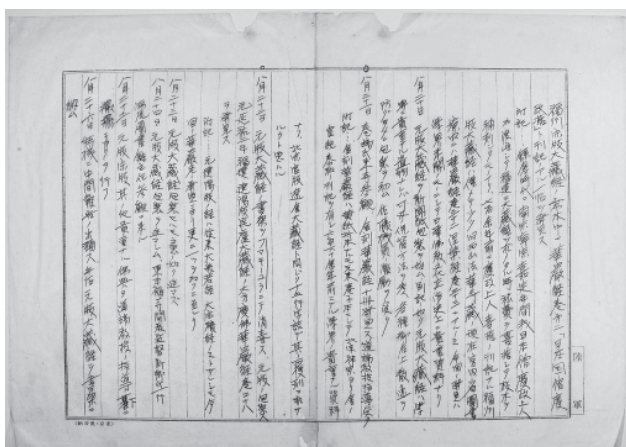


太原崇善寺所藏磧砂延聖院版大藏經概説／
一、該大藏經部帙卷数／

自天字函至煩字函 五百九十一帙／
一千五百二十一部 六千參百拾卷／
崇善寺 現存冊数 四千八百二十九帖／
散佚冊数 九百零六帖／

二、磧砂延聖院大藏經局／

元僧円至ノ撰文ニナル平江府陳東府陳湖延聖院記ニ
拠レバ該禪院ハ南宋ノ孝宗ノ乾道八年僧寂堂ノ創建
ニ係リ、大藏經局ハ院ノ北坊ニアツタ、理宗ノ紹定
年間ニコノ大藏經局ガ開設サレテ刻經印刷事業ヲ
始メタノデアル。其後二十餘ノ年ヲ経テ宝祐六年二
大火アリテ延聖禪院ハ燬堂ト寂堂和尚ノ塔ヲ除キ他
ノハ悉ク烏有二婦シ大藏經ノ雕印事業ハ全ク頓座シ
開慶、景定ノ四・五年ノ間ハソノ活動ヲ見ルコトガ出
来ナカツタ、コノ大火ニ以前ニシテ刻經板ガ多少類
焼ヲ見タカモ知レナイガ、大多數ハソノ難ヲマヌ
ガレテ景定五年ニ至リ再ビ刻經事業ノガ復興シ度宗
ノ咸淳年間ハ華々シイ活動ヲ見タノデアル、然ルニ
南宋末元初ノ兵ノ乱ニ禍ヲ受ケ再度ノ事業中止ノヤ
ムナキニ至ツタ、元成宗ノ大徳年間ニ至リ再興ノ
緒ニ就キ雕版刻經ノ事業モ盛ントナリ殊ニ松江府僧
録管主ハノ後援ヲ受ケノ中統鈔式伯錠ノ施入ニヨリ
一年ナラズシテ未完成經典一千有餘卷ノ雕印ヲナシ
ノ至大、延祐、至治年間ニ及ンデ全藏ノ完雕ヲ見タ
ノデアル、／
三、該大藏經局ノ組織制度／
上述ノ如ク磧砂版大藏經ハ南宋ノ理宗、度宗ノ時
代紹定、嘉熙、淳祐、宝祐ノ景定咸淳ニ至ル約
二十五ヶ年ト元ノ成宗武宗、仁宗英宗ノ時代即チ大
徳ノ至大、皇慶、延祐、至治ノ二十五ヶ年、併セテ
宋元兩代五十年間ニナル木版印刷ノ大藏經デアルガ、
ソノ刻經処トナツタ大藏經局ハ極メテ完備セル系統
組織ヲ以テナサレタノデアル、刻經処ヲ主管スル
管局僧、提調僧ノ下ニ勸縁僧、勸縁道ノ者、都勸縁
者ガ平江府、嘉興府下ノ各地有縁者ヲ教化募財シ、
經刻処デハ／板下ノ書寫經典ノ文字ノ異同ヲ正ス対



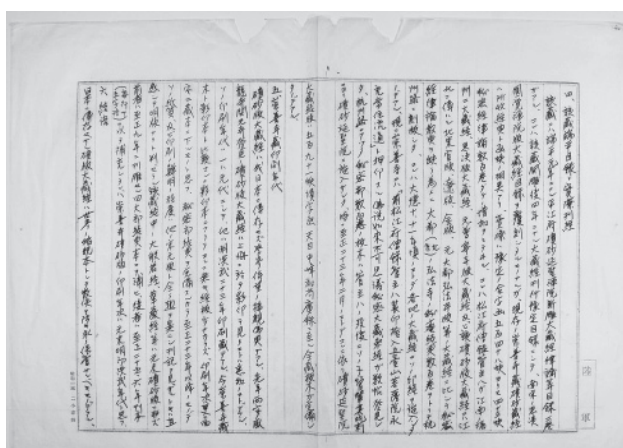
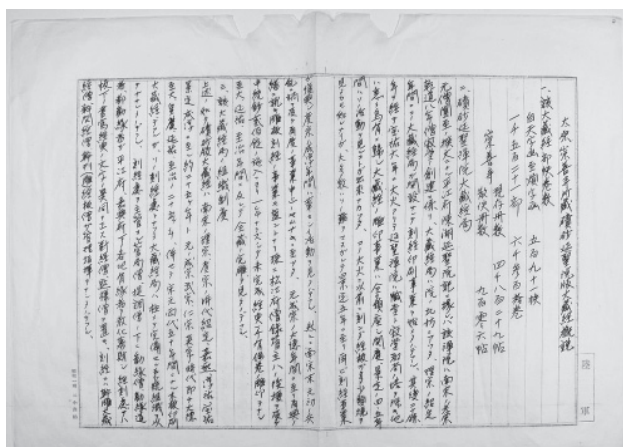
經僧、点樣僧ヲ置キ、刻經ニハ幹離大藏ノ經僧、幹
開經僧、幹刊（雕）經板僧ガ管理指揮ヲナシタノデ
アル、

四、該藏端平目錄ト實際刊經ノ

該藏ニハ端平元年ニナル平江府磧砂延聖禪院新雕大
藏經律論等目錄二卷ノガアル、コレハ該藏開雕後四
年ニナル大藏經刊行予定目錄ニシテ、南宋ノ思溪ノ
円覺禪院版大藏經目錄ヲ覆刻シタルモノナルガ、現
存ノ崇善寺藏磧砂藏經ノハ所収經典ト函帙ノ相異アリ、
實際ハ予定ノ合字函五百四十八帙ヨリモ四十三
帙ノ秘密經律論數百卷ダケノ増加ヲミテキル、コレ
ハ松江府僧錄管主八ガ江南ノ福ノ州ニ大藏經、思溪
版大藏經、元普寧寺版大藏經、及ビ該磧砂版大藏經
ニハ江ノ北ニ伝ハル北宋官版、遼版、金版、元大都
弘法寺版等ノ大藏經ニ比シテ秘密ノ經律論數典ヲ欠
ク為メニ大都（北京）ノ弘法寺ノ秘密經典數百卷ヲ
トリテ杭ノ州路ニ刻板シタ、コレハ大徳十、十一年
頃ノコトデ、各地ノ大藏經ニソノ印經ヲ施入シタノ
ノデアル、現ニ崇善寺ニハ「前松江府僧錄管主八装
印捨入、五台山菩薩院永ノ充常住流通」ト押印スル
仏說如來不可思議秘密大乘經ガ數帖発見シ、タ、杭
州路ニアツタ秘密部數百卷ノ板木ハ管主八ノ歿後ニ
ソノ子管輩其吃刺ノヨリ磧砂延聖院ニ施入サレタ、
時ニ至正二十三年二月ノコトデコレニ依リ磧砂延聖
院ノ大藏經版ハ五百九十一帙煩字函天目中峰和尚広
録ニ至ル全藏板木ガ完備シ、タノデアル、

五、崇善寺藏印刷年代ノ

磧砂版大藏經ハ我日本ニ伝存セズ学界待望ノ稀觀仏
典デアアル、先年西安ノ臥ノ龍寺開元寺発見ノ磧砂版
大藏經ハ上海ニ於テ影印ヲ見タコトハ悉知ノコトデア
アル、ソノ印刷年代ハ一ハ元代ニシテ、他ハ明洪
武二十三年印刷藏デアアル、今崇善寺藏ノ木（マ）
ト影印本ト比較スルニ影印本ニアリテコレニ無キ經
板少ナカラズ。印刷年次ハ更ニ西ノ安ニ藏本ニ下ル
モノト思フ、秘密部經典ヲ完備スルカラ至正二十三
年以降ノモノデ、ソノ紙質、及ビ印刷ノ鮮明ノ程度
ハ他ノ宋元版ト全ク趣ヲ異ニシ刊記ヲ見ザルトキハ



直／感シテ明版ナリト判ゼラル、該藏經中ノ大般若經、華嚴經等ハ元來磧砂版ニ非ズ／前者ハ至正九年ニ刊雕セル四大部經典本ニテ補ヒ、後者ハ至正二十五年刊本／（毎行十五字詰）ヲ以テ補充シタレバ崇善寺磧砂版ノ印刷年次ハ元末明初洪武年代ト思フ、

六、結語

日本ニ伝存セザル磧（ママ）版大藏經ハ世界ノ稀觀本トシテ散佚ヲ防キ永ク保管サルベキモノデアル、

太原崇善寺所藏元普寧寺版大藏經概説／
一、該大藏經部帙卷数／

自天字函至感字函
一千四百二十二部

六千零十卷／

現存冊数

一千二百二十五帖、／

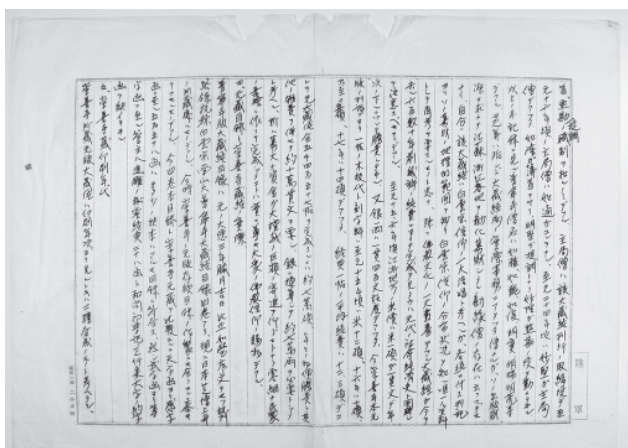
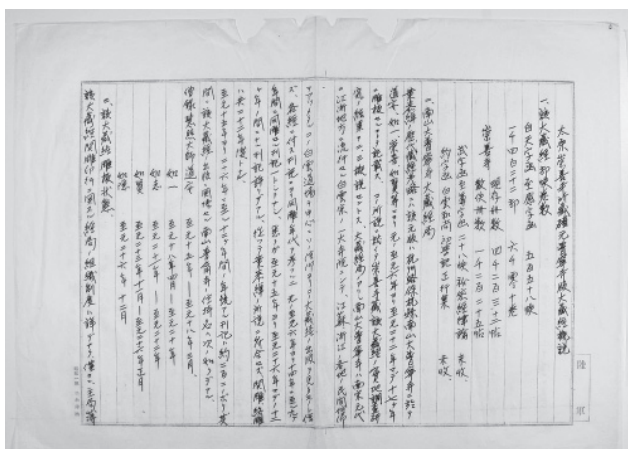
崇善寺

散佚冊数

約字函 白雲和尚 初学記正行集 未収、／

二、南山大普寧寺大藏經局

葉恭綽ノ歴代藏經考略ニハ該元版ハ杭州路餘杭泉南山大普寧寺ニ於テ／道安 如一、崇喜、如賢等ニヨリ元ノ至元六年ヨリ至元二十二年マデ十七ヶ年ノニ雕板セルコトヲ記載ス、コノ所説ニ就イテ崇善寺藏該大藏經ノ実地調査研／究ノ結果ヲニ、三概観セントス、大藏經局ノアリシ南山大普寧寺ハ南宋元代ノ江浙地方ニ流行セリ白雲宗ノ一大寺院ニシテ、江浙ノ各地ノ民間信仰ノヲアツメタルコノ白雲道場ヲ中心ニソノ信仰ヨリコノ大藏經ノ出版ヲ見タモノト信／ズ、各經ニ付ス刊記ニヨリ開雕年代ヲ考フルニ元ノ至元六年ヨリ至元十四年ニ至ル九ヶ／年間ニ開雕セル刊記一トシテナシ、悉クガ至元十五年ヨリ至元二十六年マデノ十二ヶ／年ノ間ニ刊記許リデアル、從ツテ葉恭綽ノ所説ニ符合セズ、開雕、終雕ノハ共二十二年後トナル、／
至元十五年ヨリ二十六年ニ至ル十二ヶ年間ノ年号アル刊記ハ約二百二ノボリ、其ノ間ニ該大藏經ノ出版



【特別調査報告】西厳寺蔵「小川貫式資料」調査報告（一）

二 関係セル南山普寧寺ノ住持名ハ次ノ如クデア、

僧録慧照大師 道安

如一 至元十五年―至元十八年三月、

如志 至元十八年四月―至元二十年、

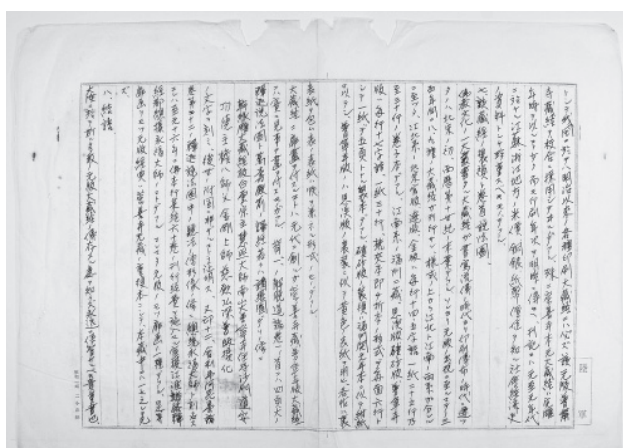
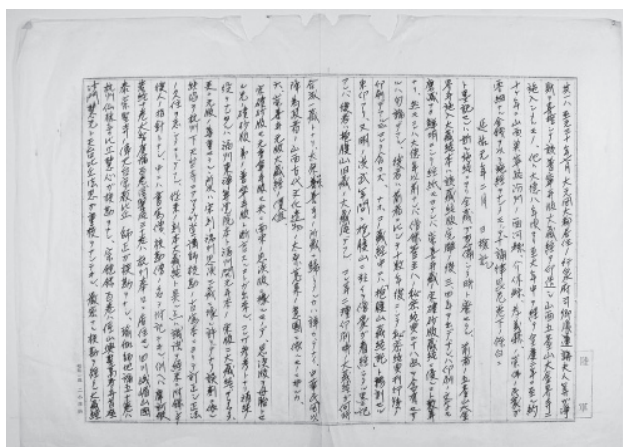
如賢 至元二十一年―至元二十二年、

如隱 至元二十三年十一月―至元二十六年正月、

如隱 至元二十六年十二月、

三、該大藏經雕板狀態、

該大藏經開雕印行ニ関スル経局ノ組織制度ハ詳デナク、僅カニ、主局、簿／首、点勘提調ノ職制ヲ知ルノミデア、主局僧ハ該大藏經刊行ノ取締役デ至／元十六年頃ノ主局僧ハ如通ガコレラナシ、至元二十四年頃ハ堅ガ主局ノ僧デアツタ、如隆ガ簿首ヲヤリ、明堅ガ提調トナリ妙性ガ点勘ノ役ヲ勤メテキル、／以上ノ外記録ニ見ル普寧寺僧名ハ如雅、如甄、如俊、明美、明瑞、明亮等デア。是等ハ殆ンド大藏經局ノ實際事務ニアツタ僧ナルガ、ソノ出版財ノ源ヲ求メテ江蘇、浙江各地ヲ勸化募財シタル勸緣僧ノ存在ハ云フマデモ／ナイ、自分ハ該大藏經ハ白雲宗信仰ノ一大結唱ト考ヘルガ、各經ニ付ス刊記／ヨリソノ募財ノ地理的範圍ヲ知り白雲宗信仰ノ分布状況ヲ知ル唯一ノ資料／トシテ再考ヲ要スルモノト思フ。殊ニ仏教文化ノ一大叢書デア大藏經ガ今ヲ／去ル六百年前幾許ノ經濟史ノリテ完成ヲ見タカハ元代ノ社會經濟史ト関連シ／テ注意スベキコトデア。至元十五、十六年頃江浙（ママ）地方ノ米価ハ米一碩ガ一貫文デ年／次ノ下ルニツレテ騰貴シテキル、又銀一兩ハ一貫四百文程度デアツタ、今崇善寺本元／版ノ刊記ニヨリ一帖ノ木板ト刻字料ハ至元十五年頃ハ米十二碩、十六年八十碩、／乃至十五碩、十七年八十四碩デアツタ、經典



一帖ノ平均経費ハ十二、三碩デコノレヲ元大蔵経全五千四百五十七帖ヲ完成スルニハ約七万碩、年々ノ物価騰貴ト其ノ他ノ雑費ヲ併セテ約十萬貫文ヲ要シ、銀ニ換算シテ約七万両ヲ必要トシタノト考ヘル。斯ル募大ナ資金ガ大檀越ノ巨額ノ寄進ヲ仰グコトナク零細ナ民衆ノノ喜捨ニ依リテ完成シタコトハ実ニ尊キ大衆ノ仏教信仰ノ賜物デアル、

四、元蔵目録ト崇善寺蔵経ノ實際、

普寧寺版大蔵経目録ハ元ノ大徳三年膺月吉日比丘如瑩序文ヲモツ杭州ノ路餘杭臬白雲宗南山大普寧寺大蔵経目録四卷アリ、現ニ日本芝罘上寺ノノ所蔵ニ係ルモノデアル、今時崇善寺ノ元版存欠目録ノ作製ニモ全クコレニ基キテナセルモノデアル、今四卷本目録ト崇善寺元蔵ヲ比較スルニ天字函ヨリ感字ノ函ニ至ル五百五十八函ハ多少ノ欠本ハアルモ目録ニ符合ス、然シ武字函ヨリ尊ノ字函ニ至ル管主八追離ノ秘密經典二十八函ト和尚初学記、正行集六字ノ約字ノ函ヲ欠イテキル、

五、崇善寺蔵印刷年代

崇善寺所蔵元版大蔵経ハ印刷年次ヨリ見ルトキハ二種合成ノモノト考ヘラル、其一ハ至元三十年七月大元国大都居住ノ行泉府司郷張遵誨夫人等ガ淨ノ財ヲ喜捨シテ該普寧寺版大蔵経ヲ印造シ山西五台山大金界寺ニノ施入シタルモノ、他ハ大徳八年頃ヨリ至大年中ヲ経テ皇慶二年ニ至ル約十ヶ年ニ山西、異寧路汾州ノ西河県、介休県、孝義県、ノ崇仏ノ民衆ガノ零細ナル金銭ヲ以テ施経ヲナシタモノデ、十誦律毘尼卷下ノ余白ニ

延祐元年二月 日検記

ト墨記セルハ斯ル施経ニヨリ全蔵ガ整備シタ時ト察セラル、前者ノ五台山大金ノ界寺施入大蔵経本ハ該蔵経版完雕ノ後三、四年ヲ出デザレバ印刷ノ文字モノ摩滅ナク鮮明ニシテ経紙モヨケレバ、崇善寺蔵ノ宋磧砂版蔵経ニ後ルコト数等ノナリ。然モコレハ大徳年以前ナレバ僧録管主ハノ秘密經典二十八函ヲ含有セザノルハ勿論デアル、後者ハ前者ニ比シテ十数年後ニシテ秘密經典刊行後ノ印刷デアルモコレヲ含

マズ、ナホコノ蔵經中ニハ「抱腹山藏經記」ト陽刻セルノ朱印アリ。又明ノ洪武年間ニ抱腹山ニ於イテ僧衆ガ看經シタル墨記ノアレバ後者ハ抱腹山旧蔵ノ大藏經デアアル、コレ等二種印刷時ノ大藏經ガ何時ノ合成一蔵トナリ、太原崇善寺ノ所蔵ニ帰シタルカハ詳カデナイ、中華民國以ノ降為政者ノ山西古代文化遺物ノ太原蒐集ノ意図ニ依ルモノニ非ルカノ

六、崇善寺元版大藏經ノ価値、ノ

宋磧砂版モ元普寧寺版モ共ニ南宋ノ思溪版ニ拠ルモノデ、思溪版ヲ母胎トセ／ル兄ノ磧砂版弟ノ普寧寺版ト断言スルコトガ出来ル、コレガ参考トナリ補欠ノノ役ヲナシタルハ福州東禪等覺院本ト福主開元寺本ノ宋版ニ大藏經デアツタ、ノ更ニ元版ノ尊重セラル、所以ハ宋刻ノ福州思溪三蔵ニ拠ル許リデナク誤刻ニ依ルノ欠陥ヲ杭州下天竺寺ニアツタ竹堂講師校勘ノ古写本ニヨリテ訂正シ正法ノノ久住ヲ志シタコトデアアル、従来ノ刻本大藏經ト異ル点ハ識語ヲ經末ニ附録シテノ後人ノ指針トナシ、中ニハ書寫僧、校勘僧ノ名ヲ附記テキル、例ヘバ摩訶般若ノ若經十卷、大智度論百卷、涅槃經三十卷ハ杭州奉口ニ居住セル四川峨嵋山國ノ泰崇聖寺ノ伝天台宗教比丘師正ガ校勘ヲナシ、瑜伽師地論五十卷ハノ杭州仙林寺比丘慧心ガ校勘ヲナシ、宗鏡錄百卷ハ徑山興聖万寿寺首座ノ沙門慧元ト天台比丘法思ガ重校ヲナシテキル、嚴密ナル校勘ヲ經タル大藏經ノトシテ我國ニ於テハ明治以來ノ各種印刷大藏經ニハ必ズ該元版普寧ノ寺藏經ヲ校合ニ採用シテキルノデアアル、殊ニ崇善寺本元大藏經ハ完雕ノ年時ヲ以ルコト少ク而モ印刷年次ヲ明瞭ニ伝セヘ、刊記ニハ元至元年代ノニ於ケル江蘇、浙江地方ノ米価、銅銀、紙幣価値ヲ知ル社会經濟史ノノ資料トシテ珍重スベキモノデアアル、ノ

七、該藏經ノ装領ト卷首說法図、ノ

仏敎文化ノ一大叢書タル大藏經ガ書寫流伝ノ時代ヨリ印刷伝布ノ時代ニ遷ツノタノハ北宋ノ初、西曆第十世紀ノ末葉デアアル、ソレヨリ元版ノ出現ニ至ルマテノ三ノ百年間ニハ、九種ノ大藏經ガ刊行サレ、様式ノ上カラ江北ト江南ノ両系ガ分レルノニ至ツタ、江

北系ノ北宋官版、遼版、金版ハ每行十四、五字詰一紙二十五行乃／至三十行ノ卷子本デアル、江南系ノ福州二藏、思溪版、磧砂版、普寧寺／版ハ每行十七字詰、一紙三十行、梵夾本即チ折本ノ形式デ每面六行ト／シテ一紙デ五頁トナル製本デアル。磧砂版ノ装禎ハ福州開元寺本ニ似テ紺紙／ヲ以テシ、普寧寺版ノハ思溪版ノ表装ニ似テ黄色ノ表紙ヲ用ヒ、各帖ハ裏／表紙ヲ包ム表ノ表紙ハ帙ヲ兼ネル形式ノモノデアル、／

大藏經ニ扉絵ヲ付スルコトハ元代ニ創ルガ、崇善寺藏普寧寺版大藏經／ニハ実ニ見事ナ絵ヲ付スルモノガアル、背、一、ノ解脱道論卷一ノ首ニハ四頁大ノ／釈迦說法図ト万寿殿前ノ訳經若クハ講經図デソノ傍ニ／

幹縁雕大藏經板白雲宗主慧照大師南山大普寧寺住持沙門道安／功德主檐八師父金剛上師慈願弘深普皈摂化／

ノ文字ヲ刻ミ、後世ノ付図ニ非ザルコトヲ証明ス。又卽十二、舍利弗阿毘曇論／卷第十二ノ釈迦說法圖中ノ聴法ノ僧形像ノ傍ニ總統永福大師ト刻名ス／コレハ至元十六年ニ仏本行集經六十卷ノ刊行經費ヲ施入セル宣授江淮諸路釈／經部都総撰永福大師ノコトデアルコレマタ元版ノモツ扉絵ノ一種デアル、是等／扉絵ヲモツ元版經典ハ崇善寺元藏ノ重復本ニシテ、本藏中ニハ一モ之レヲ見／ズ、／

八、結語、／

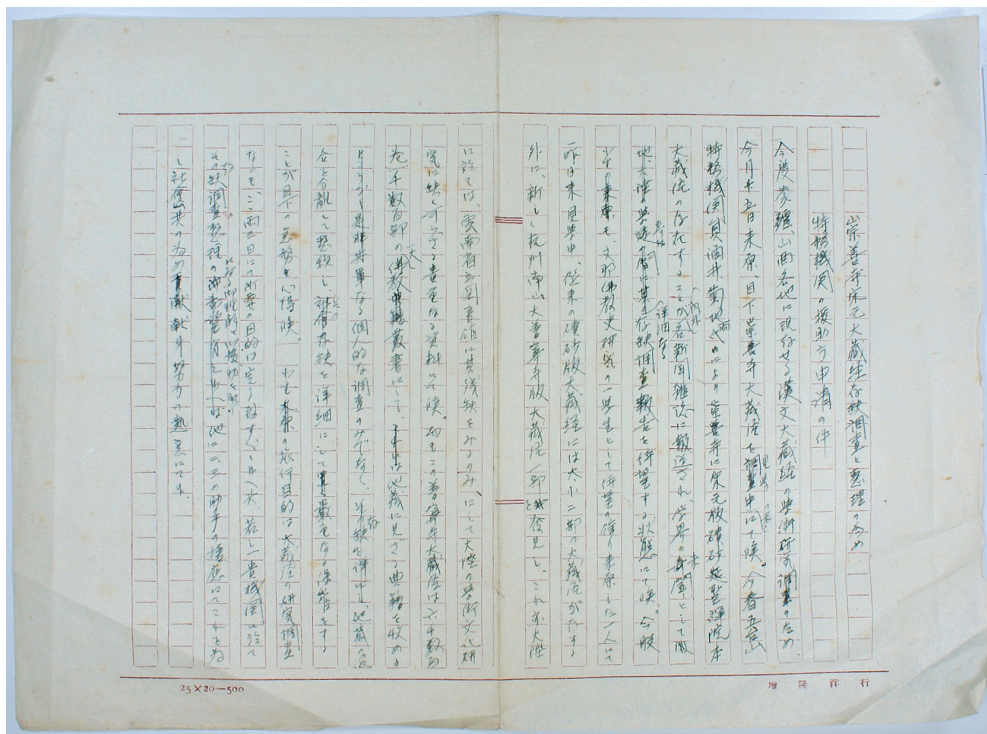
大陸ニ於テ斯ル多数ノ元版大藏經ノ伝存スル処ヲ知ラズ永遠ニ保管サルベキ貴重書也、／

(※以上はカーボン紙の1枚目にインク書、貫式筆)

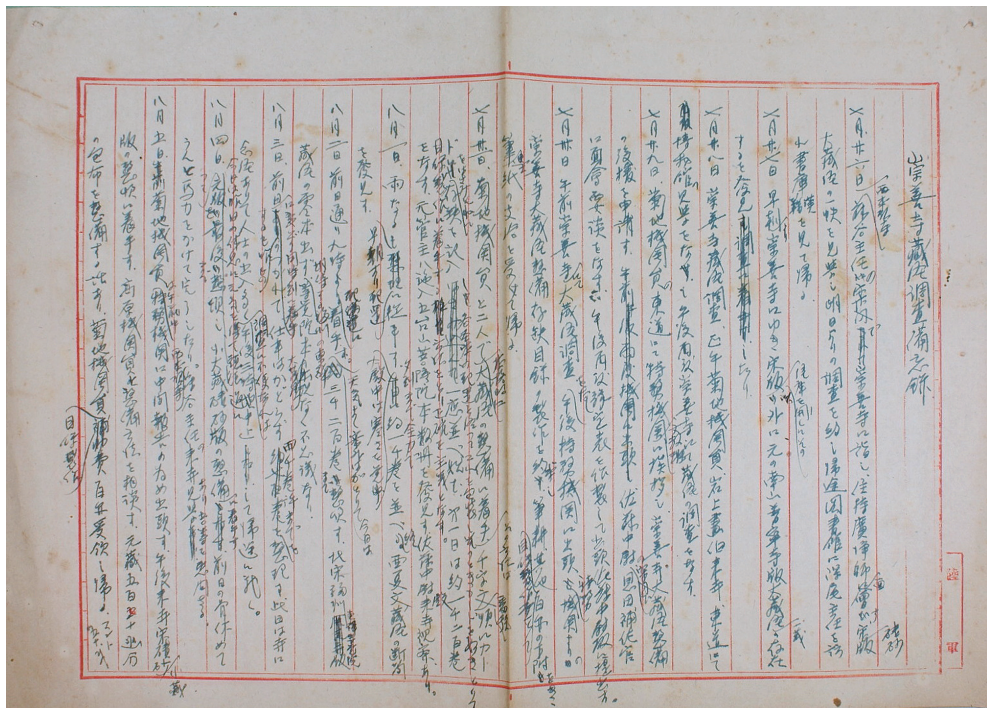
小川貫式略年表

1912	明治45年3月1日	岐阜県各務原の西巖寺に生まれる
1929	昭和4年3月	岐阜県立武義中学校を修了する
	昭和4年4月	龍谷大学予科に入学する
1936	昭和11年3月	龍谷大学文学部仏教史学科を卒業する
1939	昭和14年3月	龍谷大学研究科中国仏教史学科を修了する
	昭和14年4月	西本願寺興亜留学生として中華民国に派遣される 西本願寺立南京仏教学院主事として南京鳳山古林律寺に駐在する
1941	昭和16年7～8月	山西省特務機関の依頼により五台山で調査を行う 五台山顯通寺で行われた日本人求法僧の慰霊祭に参加する 大同で雲崗石窟などを見学する 太原の崇善寺にて元時代の普寧寺版大蔵経を発見する 崇善寺発見の普寧寺版大蔵経を陸軍特務機関の支援を得て調査する
	昭和16年9月	経文の発見など、貫式の五台山の調査成果が『朝日新聞』で報じられる
1942	昭和17年3月	中国から帰国する
	昭和17年4月	龍谷大学文学部の助手となり、中央仏教学院の嘱託講師を兼任する
1944	昭和19年	西巖寺住職を継職する 龍谷大学専門部講師 兼 司事となる
1945	昭和20年6月	龍谷大学専門部教授 兼 司事となる
1946	昭和21年6月	龍谷大学予科講師を兼ねる
1948	昭和23年4月	龍谷大学司事を兼ねる（図書館勤務）
1949	昭和24年4月	龍谷大学助教授となる（新制大学移管）
1950	昭和25年4月	龍谷大学短期大学部講師を兼ねる
1959	昭和34年4月	龍谷大学教授となる
1960	昭和35年4月	中央仏教学院講師となる
1961	昭和36年4月	龍谷大学文学部教授となる（経済学部増設）
	昭和36年11月	同朋大学で居士仏教について講演する
1964	昭和39年11月	大蔵会の50周年記念『大蔵会—成立と変遷』を執筆する
1968	昭和43年5月	龍谷大学図書館長となる
1973	昭和48年5月	『仏教文化史研究』を刊行する
1975	昭和50年4月	各務原市文化財審議会委員となる
1980	昭和55年3月	龍谷大学を退職し、名誉教授となる
2006	平成18年9月29日	死亡（享年94歳）

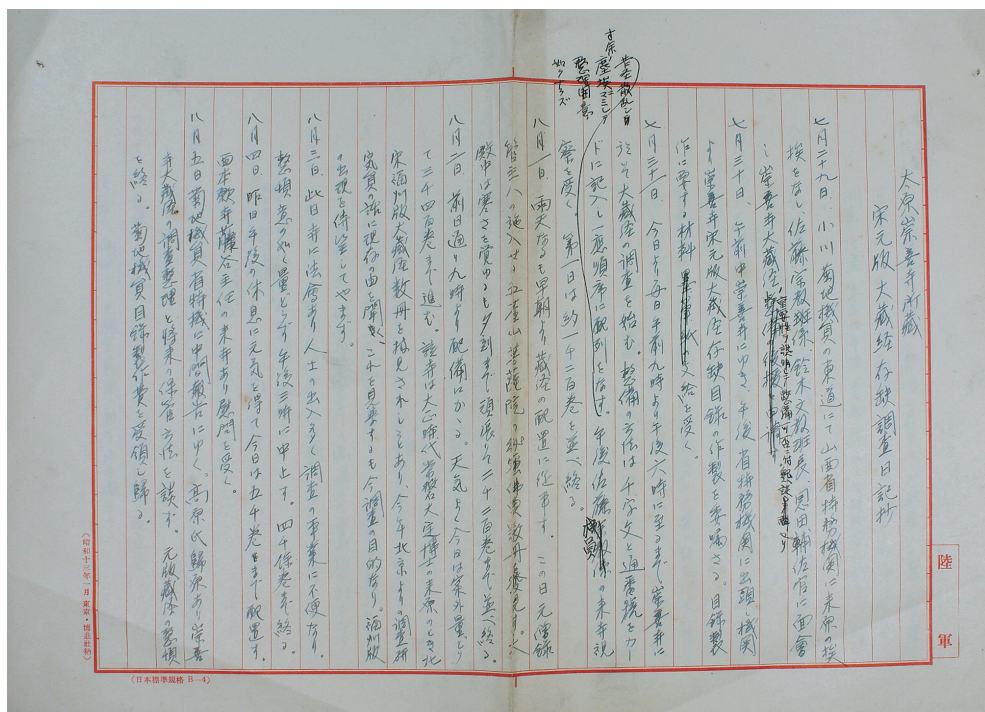
口絵一 「崇善寺宋元大蔵經存欠調査と整理の為め特務機関の援助方申請の件」



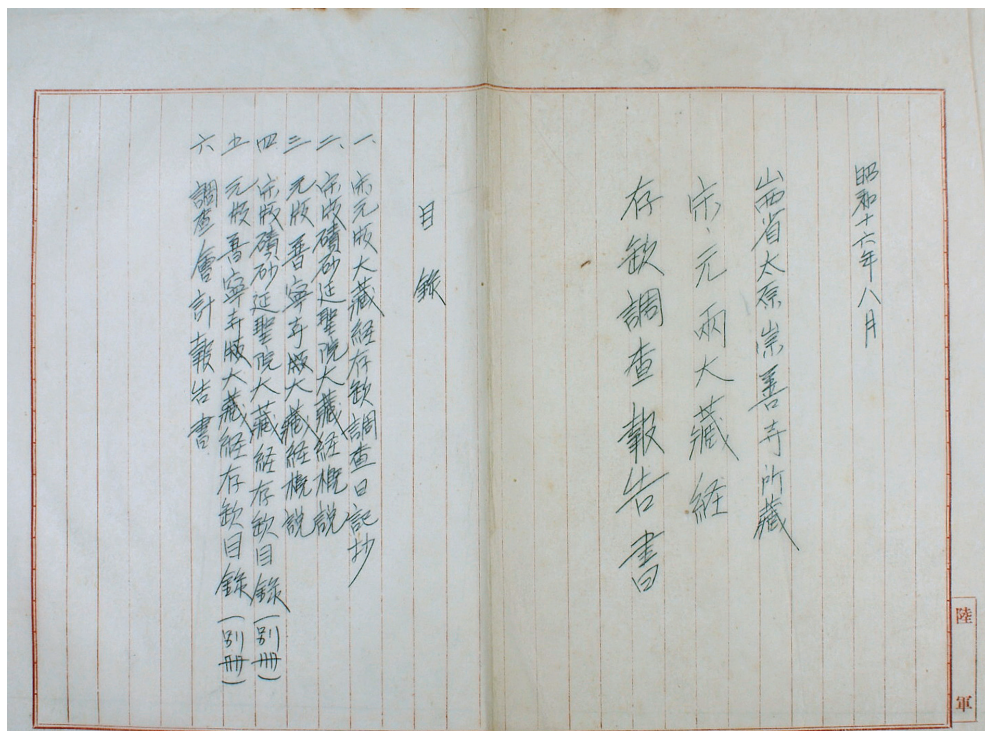
口絵二 「崇善寺蔵經調査備忘録」



口絵三 「太原崇善寺所蔵 宋元版大蔵經存欠調査日記抄」



口絵四 「山西省太原崇善寺所蔵 宋・元両大蔵經 存欠調査報告書」



執筆者紹介

- 小山正文（研究顧問）
新野和暢（客員研究員 名古屋大谷高校教諭）
市野智行（客員研究員 本学非常勤講師）
木越祐馨（加能地域史研究会代表）
藤井由紀子（所員）
中川剛（客員研究員 愛知学院大学 博士課程後期）
高木祐紀（客員研究員）
小川徳水（西厳寺住職）
工藤克洋（客員所員 京都産業大学史編纂室嘱託員）
松金直美（客員所員 真宗大谷派教学研究所助手）
脊古真哉（客員所員 本学非常勤講師）

同朋大学佛教文化研究所紀要 第三十六号

平成二十九年三月二十五日 印刷

平成二十九年三月三十一日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七―一
編集者 同朋大学佛教文化研究所

幹事 安藤 弥

電話 ○五二―四一―一三三七三

発行所 同朋大学佛教文化研究所

印刷所 株式会社 カミヤマ